震災後文学からコロナの時代に

—— オーストラリアの日本語文学研究と教育

Tomoko AOYAMA (青山友子 : Associate Professor,
University of Queensland)

✉ t.aoyama@uq.edu.au

(オーストラリア)クイーンズランド大学准教授。2020年7月末からは同大学名誉研究員。近代・現代日本文学及び文化専攻。単著に *Reading Food in Modern Japanese Literature* (University of Hawaii Press, 2008)、共編著に *Girl Reading Girl in Japan* (edited with Barbara Hartley, Routledge, 2010), *Configurations of Family in Contemporary Japan* (edited with Laura Dales and Ronit Dasgupta, Routledge, 2015)、また、翻訳書に、金井美恵子の小説2作 *Indian Summer* (原作『小春日和』, translated with Barbara Hartley, Cornell East Asia Series, 2012), *Oh, Tama!* (原作『タマや』, translated with Paul McCarthy, Fukuoka : Kurodahan Press, 2014; rev. edition Berkeley : Stone Bridge Press, 2019)。

Japanese Literary Studies and Education in Australia

: From the Post-3.11 Period to the Age of COVID-19

Having concluded four decades of teaching Japanese Language and Literature at Australian universities, now seems to be a good time for me to review various developments in the fields of research into and the teaching of Japanese literature. Broadly speaking, there has been a shift from the earlier kokubungaku (national literature) and nihon bungaku (Japanese literature) models to the multicultural nihongo bungaku (literature in the Japanese language) model, accompanied by constant deconstructions of the canon and the questioning of biases and stereotypes which formed on the basis of gender, genre, region and so on.

Particularly important in the last decade has been the notion of post-3.11 literature. There have been a number of significant international events which have directly and indirectly contributed to the remembering of the triple disaster of 2011, and to the literary quest to

discern and convey hope for the future. Since 2011, the University of Queensland has welcomed acclaimed and internationally recognised poets, writers, translators, and scholars such as Roger Pulvers, Tawada Yoko, Jeffrey Angles, Tsuboi Hideto, and Ito Hiromi. Their lectures, expositions and master classes have enabled a wide range of audiences to share in the struggle to realise hope and revitalisation through literature. Humour plays an important role in the release of tension and the overcoming of crises, and it may be of some help in the age of COVID-19.

Keywords Post-3.11 Literature(震災後文学), Literature in the Japanese Language(日本語文学), Border-Crossing Literature(跨境文学), Humour(笑), Australia(オーストラリア)

オーストラリアの各大学では、たいてい2月末に新学期(前期)が始まるが、今年は新型コロナウイルス感染対策のため、授業も会議やセミナーなども急遽オンラインに切り替わり、図書館も紙の書籍を借りることができなくなっている。世界的なこの大異変の時期、私は個人的にも大きな変化を経験した。昨年末に、1980年から40年間携わってきた日本語・日本文学の教育現場を去ったのだ。ようやく少し落ち着いたので、この機会に、これまで私の経験し、観察したオーストラリアの大学での日本語文学の研究と教育状況、特にここ十年間の越境や跨境にかかわる文学研究について少しまとめてみたいと思う。

1970年代、私が外国語としての日本語に興味を抱くようになった時には、オーストラリアはすでに日本語教育が盛んで、人口当たりの学習者数は、韓国に次いで高かった。1980年代の終わりごろからは、さらに学習者が増加した。日豪の貿易・観光などの

経済関係と文化交流が重視され、日常生活でのコミュニケーションに有用な、「実用的」な日本語が求められていた。日本の「文化」に対する関心はつねにあったが、その中心はいわゆる伝統的なものから、マンガ・アニメ・ハイテクなどに移った。研究や教育でも、日本人論的な社会・文化の境界線を前提としたものから、アジア、環太平洋など、より広い視野への移行が見られた。この背景には、オーストラリアの白豪主義から多文化主義政策への変化、アジア系移民の増加もある。

いささか回顧的になるのをお許し願いたい。私の豪州日本研究学会 Japanese Studies Association of Australia (JSAA) デビューは、1986年メルボルンのラトロープ大学での大会だった。この時に発表した非常に拙い、今から思えば論文とは呼べないようなものが、論集に入れてもらったのは、女性作家の描く男性同性愛というトピックと、文学と少女漫画を同等に扱うというアプローチが当時は珍しかったからに違いない¹。「デビュー」以来、ほぼ30年後の2015年に、再びラトロープ大学でJSAAの大会があった。その時のテーマは「日本研究」や「地域研究」を再考し、西欧中心主義からアジア・太平洋地域に目を向けるというものだった。この時の論集に収録された章では、文学研究の分野での「国文学」から「日本文学」、そして「日本語文学」へ、さらには多文化・多言語文学へ、という変遷を概観し、近年の研究動向や成果を紹介した²。80年代からの

様々な脱構築、女性文学やジェンダー、マイノリティに関する関心の高まり、ポスト・コロニアルやディアスポラの視点が注目されるようになったこと、翻訳(どんなテキストがどのように翻訳されるか)及び翻訳研究のわくの広がり、国際共同研究の充実などに触れた。

そうした大きな変化とともに、このエッセイの表題にも入れたように、ここ十年ほどの文学研究と教育を考えると、「震災後文学」という概念は欠かせない。東日本大震災の3か月前、クイーンズランド州では、2010年末から各地で洪水が起こり、2011年1月11日には、ブリスベン川の堤防が決壊して、約2000戸が被災した。勤務先のクイーンズランド大学(UQ)も、川沿いにあるために、水浸しになった。私はこの時、日本に一時帰国中で、テレビのニュースで家々や橋やフェリー乗り場が濁流に流され、見慣れた街の通りが川や湖ようになったのを見て、衝撃を受けた。この災害には世界中から支援が寄せられた。UQは日本の20以上の大学と交流があるが、その中でも、福島大学の教員と学生がUQの日本語学科の学生のために、寄付を募って、送ってくれた。その直後に、東日本大震災が起こったのだ。ブリスベンの洪水とは比べようもない規模の災害に、言葉を失った。地震や津波はもちろんのこと、原発事故の深刻さが、単に世界中の注目と同情を集めただけではなく、原子力発電に対する深い反省と、絶望から何とか希望を見出そうという努力をもたらした。

UQでは、震災直後の3月の末、国際交流

¹ Tomoko Aoyama, "Male Homosexuality as Treated by Japanese Women Writers", in Gavan McCormack and Yoshio Sugimoto eds, *The Japanese Trajectory: Modernization and Beyond*, Cambridge University Press, 1988, pp.186-204.

² "From 'National' Literature to Multicultural Literature in 'Japanese' language?", in Kaori Okano and Yoshio Sugimoto eds, *Rethinking Japanese Studies: Eurocentrism and the Asia-Pacific Region*, Routledge, 2018, pp.53-72.

基金(シドニー)主催の巡回講演で、幻想文学についてのパネル・ディスカッションが行われた。テーマは震災とは直接関係はないものの、日本文学のパネル・ディスカッションを予定通り行うということに、意義があったと思う。メンバーは、オーストラリア国立大学(ANU)のキャロル・ヘイズ氏、黒田藩プレスのエドワード・リプセット氏、そして、宮澤賢治や井上ひさし、石川啄木などの研究と翻訳など、東北と非常に深いつながりのあるロジャー・パルヴァース氏(当時は東工大教授)だった。パルヴァース氏はこれ以前にも以後にも何度となくUQを訪れ、学会やシンポジウムの基調講演、セミナー、翻訳や創作のマスタークラスなどのほかにも、自作映画『星砂物語』や脚本担当の『僕がジョンと呼ばれるまで』の上映も通して、学内外の幅広い層に、国境、ジャンル、言語を跨いだ知識と経験とを、笑いの中に分かち合ってくれた。

震災の年の9月には多和田葉子氏の“Writing across Languages and Cultures”というブリスベン・ライターズ・フェスティバルの協賛の公開講演を行った。聴衆の中には、ドイツ文学の博士課程で、多和田文学を研究しているというオーストラリア人学生もいた。私はこの前年に出た『尼僧とキューピッドの弓』の愛読者として、その著者に会える幸運を喜んだ。その後、『献灯使』や『地球にちりばめられて』など、次々に発表される震災後文学の重要作を、できれば授業や研究にも取り入れたいと思い、昨年、教師生活最後の年に、文学テキストを使った中上級の日本語のコースに取り入れた。このコースは私の退職とともに、今年からはもうなくなるのは淋しいが、今後機会があれ

ば、日本語・日本研究・翻訳研究などのコースで「震災後文学」をどのように扱えるか、発表したいと思っている。

震災後に徐々に目を開かれたもののひとつに、現代詩がある。2016年の3月11日、日本にいた私は、城西大学での現代詩人たちによる座談会と詩の朗読会「荒ぶるゆりかご—3・11の惨事への詩的な応答—」を聴くことができた。この時出版された、Jeffrey Angles, ed. & trans., *These Things Here and Now : Poetic Responses to the March 11, 2011 Disasters*, Josai University Press, 2016には、アングルス氏の“How to Write Poetry in a Broken Language”という力のこもった概論と、和合亮一、平田俊子、高橋睦郎、伊藤比呂美、新井高子、佐々木幹郎、吉増剛造、田中庸介、管啓次郎、水田宗子、田原、ジェフリー・アングルス、大崎清夏、谷川俊太郎諸氏の日本語で書かれた詩の英訳が収録されている。朗読会では、これらの詩人たちの多くと、白石かず氏が登壇した。

翌2017年、キャンベラで開催された詩祭と日本の女性詩人についてのシンポジウムにも出席する機会を与えられ、詩人や研究者、翻訳家との交流ができたのも幸いだった。菊池利奈氏(滋賀大学)ほか、主催者に感謝したい。このときにも、Rina Kikuchi & Jen Crawford eds, *Poet to Poet : Contemporary Women Poets from Japan*, Recent Work Press, 2017という10人の女性詩人による日本語の詩とその英訳を収録した詩集が出版され、朗読会では、そのうちの4人(新井高子・伊藤比呂美・川口晴美・山崎佳代子)、および、様々な文化・言語の詩人たちの作品をバイリンガル朗読で聴くことができた。シンポジウムでは、管啓次郎教授(明治大学)、『枕

草子』などの翻訳で知られるやメレディス・マッキニー氏(ANU)、坪井秀人教授(日文研)の基調講演に加え、女性の詩と翻訳についての発表がなされた。

続いて、2018年の8月には、アングルス教授を、また、2019年の6月には坪井教授をクイーンズランド大学の School of Languages & Cultures の Distinguished Visitor Program として招き、講演やセミナー、マスタークラスなど充実したプログラムを組むことができた。上にも触れたように、私は2019年の11月末にUQの仕事を終え、2020年半ばの正式な退官までは休暇を取ることになっていた。その最後の最後に、学科の主催する Crossing Boundaries : Language, Culture and Migration というシンポジウムに伊藤比呂美氏の基調講演が入れられたのは、この上ない喜びだった。ここ数年来、私は、女性の身体性(と食)、性(と食)、老い(と食)、石垣りん、石牟礼道子などとのつながりから、また、鷗外や太宰治の(女性の視点からの)読み直しと書き換え、古典や仏典の現代語訳、そして、とりわけ、太平洋を挟んだ介護文学として、また、移民・移住・旅行の文学として、伊藤氏が精力的に出すどの本も、むさぼるように読まずにはいられなかったからである。

私は以前から、パロディやもじり、言葉の遊び、ユーモア、笑いにも興味を持ってきたが、10年ぐらい前から、鶴見俊輔の『アメノウズメ伝』にほとんど取り付かれているといってもいいほど、いくつもの論文で鶴見の理論を使っている。特に、何度となく引用しているのは、「天と地のわかれめに立って、異相の人を前にした時のアメノウズメの、対等性を求めて排他的でない態度」³

というところである。サルタヒコに対するアメノウズメの自由さ、また、シャーマン、トリックスターとしてのパフォーマンス、特に、笑いによって危機を回避する力を、伊藤比呂美氏は鮮やかに体现している。また、多和田葉子氏も、そして、ロジャー・パルヴァース氏も、それぞれ違ったやり方で、跨境文学に開放と自由とユーモアをもたらしているといえるだろう。

コロナのために、オーストラリアでも、国際線はもとより国内線の飛行機もほとんど飛ばず、州境も閉ざされている。このような時に、アメノウズメなら、どのように、風穴を開け、光と笑いを取り戻してくれるだろう。また、私たちはどうすれば、アメノウズメを見つけ、アメノウズメになれるのだろう。

³ 鶴見俊輔集・続5『アメノウズメ伝』(筑摩書房、2001)、p.120.